



◆一志米

◇旧一志郡は米どころ

「一志米」と言えば、旧一志郡で栽培される米の総称だ。1938年の一志米調査書には、「一志郡は三重県の中部に位し、古来良米を産するを以て名あり」という記述もあるという。

今回は、あぐりネット三重中央（山田朋一常務）の協力で、その本場とされるJA三重中央・営農センター白山内の「白山町稲作部会（池田昌司部会長）」の「特別栽培米」を紹介する。



◇白山町稲作部会の取り組み

同部会が取り組む「特別栽培米」には、無農薬、無化学肥料の米がある。食の安全を求める消費者の声にこたえたものだ。普通に作られている米も、基準を守っているのだから問題はないのだが、より安全で、よりおいしい米を、環境保護も考えながら作っている。

◇雑草との戦い

4月上旬から始まる種もみの消毒の際にも、農薬は使わない。苗を育て、田をおこし、5月上旬から中旬にかけて田植え。

その後の一番の悩みは除草だ。イネのための栄養を雑草に吸い取られるのを防がねばならない。しかし、この「特別栽培米」には除草剤が使えない。代わりに米ヌカや食用にならないクズ大豆の持つ成分を利用して除草するのだが、除草剤ほどの効果はないため、機械と手作業が必要になる。生産者の大田雅久さんが「5、6月に何回草取り



ができるかがポイント」と言う通り、普通の米と比べ、何倍もの手間がかかるのだ。また、中谷秀也さんは一部の田でアイガモ農法を導入している。アイガモは雑草や害虫を食べるなどの効果がある。が、ヒナの購入費用など課題も多く、皆が導入というわけにはいかないようだ。

◇生産者とJAで田を巡回

7月上旬、特別栽培米の田の巡回に同行した。各田のイネをカッターナイフで半分に分ける。見えないところで育っている幼穂（ようすい）と

いうイネの赤ちゃんの出来具合を確認する。普通は幼穂が1センチぐらいで追肥するが、有機肥料は効くのに時間がかかるため、5センチほどで追肥するそうだ。

◇獣害との戦い

巡回中、「デンサク」という言葉が耳に入った。尋ねると、「電流が流れる柵」の略称で、動物避けだという。山中のエサが減ったためか、シカやイノシシが里に出て、田畑を荒らす。電柵や網で、田を囲うという余分な仕事も増え、イネを守り育てるための苦勞は計り知れない。



◇実りの季節はもうすぐ！

「お盆過ぎにもう1度巡回があるから、来てみたらビックリするよ」と大田さん。7月に青々としていた田が黄金色に輝く日も近い。生産者のまごころがこもった「一志米」の新米が食卓に届くまで、もう少し。

「うまい！」という消費者の言葉が、一志米作りに関わる人たちには最大のご馳走かも。

お問い合わせは、

JA三重中央・営農センター白山・電話059(262)3000、あぐりネット三重中央・電話059(256)8141まで。

